

タイトル 「発達障害の理解と行動支援」

講演者 横浜国立大学教育学部
准教授 神山 努 氏

発達障害がある子ども達に対する教育支援が注目され始めて20年以上が経過しますが、学校や社会の状況変化に伴い、発達障害教育の検討は引き続き求められています。本日は、発達障害の特性について事例をふまえて解説させていただくとともに、発達障害がある子どもたちが示す行動上の問題についての理解と支援について特に取り上げていこうと思っております。学校において発達障害がある子どもたちが示す行動上の問題の背景理解の方法と、それをふまえた教育方法について解説していきます。

まず、なぜ「障害」の概念があるのかということについて考えていきたいと思います。病気などは治療などを経て回復し、一時的なものです。一般に、障害は、永続的な社会困難な状況を指します。また、サポートを考える際の指標となるものです。それゆえ、障害は、どのような状態・実態なのかまで、本人・周囲は理解する必要があり、本人への訓練等だけでなく、社会へのアプローチが必須となってきます。そのため、「障害」という概念があるのです。

それでは、一般的な「発達障害」の特徴についてみていきましょう。まず本人の「特性」や「困難」が周囲から理解されないという特徴が挙げられます。なぜかという、1つには、外見上の特徴がない。次に、能力領域によっては困難がないことです。つまり、見てすぐにわからない。また、ある領域には、他の人と同様、むしろそれ以上の能力を示す人もいて、その障害が、他のことはできるのだからできないのは本人の努力不足と勘違いされることもあります。問題の原因が本人の努力不足等にあるとされて、そのことが

たとえ善意であったとしても、本人を追い詰めることにつながります。二次的な障害へとつながる危険性もはらんでいます。二次的な障害とは、失敗経験から周囲の指摘や評価から委縮などしてまた失敗経験をし、周囲の指摘・評価がさらに厳しくなりというように負のスパイラルのような社会的悪循環に陥ることです。その結果、自尊心の低下や二次的な障害、外向性としては、攻撃、非行といった反抗挑発症、内向性としては、抑うつ、不登校といった気分障害や適応障害などを発症することもあります。個人情報保護のために部分改変してこのような例をお示しします。ひらがなは読めていたが、気分が悪くなるくらい大変な生徒に、おそらく良かれと思ってもっと頑張ればきっと読めるようになると励ます先生がいました。このように「障害」はときに本人だけでなく社会からつくられることもあるのです。

発達障害の可能性のある生徒の資料をご覧ください。文部科学省の全国調査の結果です。ただし、本調査はあくまで各学校の回答であることは留意しておかなくてはなりません。推定値ですが、クラスにおおよそ少なくとも1人は何らかの発達障害をもった生徒がいらっしゃるということになります。

発達障害には、スライドにあるようにASD、LD、ADHD、知的障害があります。発達障害者支援法の施工以前は、このような発達障害者は「支援のはざま」にあるとされていました。自閉スペクトラム症の特徴は、社会的コミュニケーション、対人相互作用の持続的困難、行動、興味、活動の限定された反復的な様式をとることが挙げられます。感覚過敏あるいは鈍麻の特徴

は、五感いずれかの過敏あるいは鈍麻で、外的にも分かりにくく、本人もときに自覚がなく、心理状態の影響を受けます。自閉スペクトラム症の女性は、意図の有無にかかわらず、自閉スペクトラム症の症状を隠す行動をとることがあり、本人の心理負担が高いと考えられ、社会的要因があるかもしれないと言われています。注意欠如・多動症（ADHD）は、不注意、多動・衝動性のいずれか、または両方を特徴としています。限局性学習症（LD）は読み、書き、算数のいずれかまたは複数の特定の困難を特徴としています。

青年期・成人期の困難な例としては、人間関係のトラブルや一人であることへの葛藤、状況理解、判断のミス、ケアレスミスの反復、昼夜逆転、預金管理などの生活の困難、大きな判断を急にするなど挙げられます。

次に、発達障害者への支援について、話していきたいと思います。本人への支援としては個別や小集団でのソーシャルスキル指導などがあり、周囲への支援としては、環境調整や合理的配慮などがあります。ただし、土台はあくまで本人の意思決定となります。行動分析学からの行動支援としては、本人が気になる行動を起こす理由を知り、環境を整えることが大切です。

では、本人支援と周囲支援のどちらが大切か。言うまでもなく、その両方です。もちろん、その比重、内容や個別事例で変わります。あるいは、時代によっても変わります。ただし、意識しないと本人支援ばかりになってしまうので注意が必要です。

次にインクルーシブ教育について、お話いたします。インクルーシブ教育とは「多様な子どもたちがいることを前提とし、排除されやすい子どもたちも含めて多様な子どもたちの教育を受ける権利を地域の学校で保証するために、教育そのものを改革していくプロセス」です。当然、その在り方も時代によって変わります。その際、本人の意思決定が一番大切です。支援をどう利用するか、本人が決めて動いていくこととなります。それでは周囲から見て、本人の選択に疑問

がある時はどうすればいいでしょうか。それには、まず、本人とよく話し合い、お互いの意見を尊重し、やはり、最終的には本人の意思を尊重するということとなります。また「意思決定」は本人のみの問題でしょうか。この問いには、本人のみではないということになると思います。当然、本人の意思決定は周囲も影響を受けるからですが、やはり、一番影響を受けるのは本人ですので、難しいですが、丁寧な話し合いの上、両者が納得できる決定が望ましいと思います。

最後にまとめとなりますが、発達障害のある子どもの教育で大切なことは、自分でできることを増やすこと、自分一人ではできないことがあることを知ること、できないことがあった時の対処法を知ること、できないことに直面した際の捉えを知ることです。